改教時報

第十二號

明治三十二年六月十五日發兌

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を堅固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。

六、社會問題を講究して慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。

七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事、

十一、殖民傳道を奬勵する事。

十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

目次

社說
◎貧民教育　文學士　常盤大定

論說
◎慈善に就きて

會報
◎伊勢三重縣國民佛教會◎河內北河內郡顯耀會◎播磨明石の演說會◎甲斐釋尊降誕會◎上野高崎各宗同盟會◎肥後釋尊降誕會◎後志北海佛教徒同盟會◎本會役員の名譽職當選

社會
◎本願寺派の慈善事業◎基督教果して衰へたるか◎自治制と黨爭◎內地雜居の準備◎支那人を如何にすべきか◎高等視學官◎僧權の侵入◎東亞に於ける回教徒

雜錄
◎殖民に對する宗教の必要（完）　郡司大尉

信眞
◎靜觀錄（九）詩的信仰は一種の慢界　文學士　近角常觀

令普
◎尾張の慈善家岩井利右衛門翁　文學士　本多藤里

政教時報

貧民教育

(一)貧民教育の必要

我邦教育事業は進歩せしとはいへ、未だ國民教育の恩惠に浴せざる者、猶學齡兒童百人中に四十人近くも有る事は、統計表の明示する所なり、又相應に教育を受けし者にても罪惡を犯す事も尠からずと雖も、犯罪者の多數は全く教育を受けざるか又は教育を受くる事乏しき者ある事も亦刑事統計の表示する所なり、而して此等犯罪者爲に年々費す所の監獄費警察費等は實に驚くべき巨額に上り居るなり、去れば貧民教育の急要なるは言ふまでもなし、社會は明かに彼等を教育すべき義務を有するなり、又彼等を教育するは社會の利益たるなり、然らば如何にして貧民を教育すべきか、是一の難問なり、此難問を解釋せんと欲せば、先づ貧民の實力を檢覈せざるべからず

(二)貧民の實力

余輩の視察は猶未だ小範圍に過ぎざれば、是を以て全般に向て斷案を下すの早計なるは固よりなりと雖も、試みに稍視察を遂げたる東京の飢寒窟と二三地方の狀態に付て概論せば、高き授業料を拂ひて就學せしめ得べき者は余輩の論題外とするも、授業料だに免除せば、筆墨紙位は自辨しても登校せしめ得べき能力は殆と皆具へ居るを發見せり、然らば世に慈善主義の學校設立せられなば、喜で彼等は入學すべきに實際其成功する者の少きは如何なる原因に由るか、余輩は從來此現象を左の如く解釋せり、兒女も既に十歲前後に至れば何か內職を稼ぎて家計の助を爲すべし、左なくも弟妹の子守を爲して父母の手助を爲し得べければ、時間を惜みて來學せざるなるべしと、子守をして親の手助をするは之れあり、然れども猶十歲以下の兒女に幼き弟妹を任す事は父母が爲さゞれば、義務教育を受くる間は左程時間に差支は無きなり、若し夫れ內職云々の事に至りては、余輩と共に誤解し居る人少からざるへしと雖も、是は貧苦の上に父母が病苦に沈めるとか、或は非常の不景氣に遭遇せるなど、特別の場合を除くの外は、貧民兒童內職の所得は決して、家計の助とは爲らずして、皆其兒童自身の徒費する所となるなり、彼等は內職の所得を以て非時の買ひ食ひを爲すなり、鉢帳芝居の見物に出掛くるなり、見せ物を見に行くなり、一層性質の惡しきは勝負事に費す者さへあるなり、要するに自ら得し處の金錢は自ら費消するに任すは一般下民の狀態と見えたり、彼等は殆ど各下等劇場の外題の代り目には、一度は必す見物する如きの有樣なり試に下谷万年町淺草山伏町松葉町邊へ來りて、少しく觀察せよ、下民が如何に演劇通あるかは實に驚くべきものあらん、故に彼等に向て最効力ある學校は下等劇場なりといふべし去れば彼等が慈善小學校にすら來學する者の少きは、家計の困難よりも寧ろ大ある原因の存そるあるを知らざるべからず

(三)貧民教育の障害

貧民を教育せんとするに其障害となるべきもの多しと雖も、最甚しきは彼等が家庭の狀態の然らしむる所なり、通常良家の兒童は先づ家庭に於て教育せられて後、學校に移る者なり、然るに下民の子弟は此家庭の教育を缺乏し居るなり、今これを少しく條擧せば、

一父兄教育の必要を感する薄き事

二兒童學校の窮屈を厭忌する事

三父兄の監督行屆かざる事

等は重なる貧民家庭の欠點なり、父兄長上にして、教育の必要を切實に知るあらば、子弟を督促して、徒らある芝居見物などに惜ら時間や金錢を費す事、及び其爲に錢儲の內職を爲す如きは制止して學校に出てしむべきなり、去れども今日の貧民は未だ夫までには進歩し居らざるなり、嚴格なる家庭に生長せる兒童に取ては、學校は寧ろ氣樂なる遊び半分の場所と思はれ學校へ赴くを命の洗濯の如く感じて喜び勇みて學校に通ふあり、然るに家に在りて一も行儀作方などいふ事も見も聞も教へられし事も無き貧家の兒童に執りては學校は窮屈至極なる牢獄の如く感せられて、兎角に出校を懶く思ひ、隱かに休校なとを企て又入校を嫌忌するなり、是に於てか、父母も通學を勸めず兒童自らは厭嫌するの結果として、遂に一生は文盲にて暮す事となるなり、

又通常の家に在りては、兒女若し通常の時限よりも早く歸宅せば、父母其理由を問ひ、懶惰より休校するが如き事あらば之を責むれども、貧民に在りては父母教育を重せざれば之を爲さざるなり、又家に在りても良家の父母等は兒童を督責して復習を爲さしむれども貧家の子弟は此督責を受けざるなり又假令父兄は教育に志無きにあざるも、或は腕車を挽いて外にあり、或は人に雇はれて家にあらず、甚しきは紙屑拾ひホヤ空壜買拔は袖乞等に出てゝ父母概ね家に在らざれば、兒童學業の監督などは到底爲し得べからざるあり、斯る有樣あれば彼等の子弟は、來學すべき實力は有しながら、慈善學校へも入學せず又入學するも幾干も無くして退くか、兎角に欠席勝にて學業進まず、興味付かずして廢學するに至るなり、無智の兒童をして斯る境界に到らしむるは、抑々又社會の罪にあらずや、然らば其救濟策如何

(四)如何にして貧民を教育すべきか

余輩の見る所を以てすれば

一小學校費を國庫支辨とし、貧民を無月謝にて教育すべき事

一義務教育年限を三年とし、之を施さゞる者は制裁を加ふべき事

此二ヶ條を是非共斷行すべきあり、之を行へばとて苦痛を感ずる者は至て僅少なるべきなり、唯國民全般が負擔に堪へずといふか、無智の犯罪者の爲に不時に莫大ある損害を蒙り、監獄費警察費等に費す幾分を移して補ふを得べし全く新なる支出に掛るとするも、議員の歲費を增す如きよりも、幾層有益なるは、自明の事實に屬するをや、

余輩は重に東京市の狀態に付て立論したれども、地方に至りては貧民の狀態は、却て都會の如く甚しからざるを常とす、其教育の普及せざるは、前述の如く父兄が教育の切要を感せざると、僻陬の地は通學の不便より起る事多ければ、資力上の困難は都會の貧民よりも輕かるべし、要するに前二ヶ條を斷行せん事を當局者に向て強ても勸告せんと欲するなり

論説

常盤大定

慈善に就きて

(一)慈善の意義

世の慈善事業と稱するもの、概ね財貨物品を布施するを以て其能事と爲すものゝ如し、一方の饒多なる財貨物品を以て、他の缺乏せる所に移す、是素より慈善の業たるに背かざるべしと雖、眞正の意義に於ける慈善なりや否やは必し難し、貧民救助と稱し、細民慈惠と呼び、之に衣を與へ、之に食を給す、事誠に美なりと雖、此種の事業往々にして遊民を奬勵する事なきにあらず、勤勉夜を以て日に次ぎ、漸くにして贏ち得たる財物を取り來りて、常業なく、常職なく、他の缺を引きて憐を乞ふものに施す、予其可なるを知らざるなり、何れの世を問はず、如何なる地を論せず、遊民の盡くる期なきと同時に、貧民の絶ゆる機なかるべし、貧民悉く遊民に非ずと雖、貧民の業職おきもの往々にして見る所なり、是等の貧民をして自活の道を得、以て其自重心を高め、國民として恥ぢざるに至らしむると、是實に社會事業の目的にして、若し能く此目的を達するを得ば、是實に慈善の意味の高尚なるものなるへし、人の社會に在る、勤苦は實に免るべからざる所、勤苦するなきは是遂に人たるの本務を失却せるものなり貧民をして自棄の心を起さしむる前に當りて、之か勤苦の精神を興奮せしめ、以て就業自營の道を得せしむるに至たらば、其効果の大にして且つ廣き、財物の媒介者として、一方より之を他方に移すものと蓋し同日にして語るべからざるなり、予は思ふ、些少の財物なりとも、理由なくして之を他に施すは其効を收むる事甚だ大ならずと、又受くるものよりして之を言へばたとゑ些少なりとも他の布施を受くる時は、我亦たとひ些少なりとも勤勞以て之に報いざるべからず、勤勞以て財物を得る、是至當の理にして、天地に對して敢て恥ぢざる所、貧民を救助せんとせば、必ず貧民をして此覺悟を奮起せしむるとを要す、漫然として與へ、漫然として受くるは是實に天地の公道に背く所なるを以て、其効果も亦從て廣く且つ深きを得ざるべし、

諸般の慈善事業にして、若し能く此觀念を以て進まば、希くは其効果の確實なるもののあらん、慈善事業に對する觀念斯の如しとすれば、身奮て之に盡さんとする亦須らく唯財物の媒介者たるを以て滿足すべきにあらず、自ら力め、自ら作して以て他の龜鑑となり、其勤勞心を挑發して共に〳〵自活の道に進まんことを要す、

布施の意義たる自己の餘力を割きて他に與ふるの謂にして、餘力の中には財物あるべく、勤勞あるべく、其他百般のものを含むべし、管に財物のみを以て何ぞ布施と爲すべけん、教育を以て、布教を以て、工業によりて、商賈によりて、皆能く布施の行を爲し、以て慈善の目的を達すべし、

(二)慈善心の根元

宗教の對象は慈悲なり、吾人は此慈悲によりて初めて解脫の域に達するを得へし、常樂の混壞界に住したゞ試すして、種々の身を現し、種々の境に在りて、過現未の三世に通し、下化の益を垂れたるふは、是佛陀の大慈悲なり、瞑目自己の過去を追想し、俯仰自身の將來を想像すれは、半生の經過は光明を放てりとも覺えす、後半の爲す所亦完全なるを望むへからす、此不完全の自己如何にして能く胸裡太空の如くなるを得て、天地の間に横行するを得へき、佛陀の慈悲獨り能く其清淨心を以て、吾人の煩惱を蕩除し、其慈悲の光明界裡に吾人の垢身を攝取すへきなり、吾人若し佛陀の光明界裡に遊ふに至らは、眼に妙華を感し、耳に天樂を聽くべく、有形世界に於て經驗すへからさる無限の觀喜を得、半夜の夢は能く十萬億土の遠きに達して勇躍極りなきを得へし、此境は眞に是吾人の理想とする所、佛陀の慈悲は遂に吾人を攝取して、此境に遊ばしむるや必せり、自己既に佛陀の慈悲心を感ず、一たび自己の心裏に映せる佛陀の慈悲心は遂に死灰の如くなるを得ざるなり、然らは此慈悲心の發現は如何、吾人にして社會以外の動物ならしめは已まん、苟くも社會の一員たる上は、必ずや社會に向て其光明を發現せざるべからず、慈善社會等の各種の方面に於ける活動は皆此自己の心裏に感受せる佛陀の清淨慈悲心より發現せる光明に外からず、經說に曰く、吾人は佛陀、國王、父母、衆生の大恩を負ふ所無限なりと、又曰く、牆を破り塀を壞りて財物を奪掠する是小賊にして、恩を受けて之を報せざるものを、大賊と爲すと禽獸といへとも時に或は恩を感するものあり、況んや佛陀の清淨慈悲心を感じ、其光明界理に攝取せらるゝもの、易んぞ報恩の行なくして可ならん、彼慈善社會等の諸般の活動は此慈悲心より湧出するものにして即ち衆生恩に報ずる佛行の一端に過ぎざるのみ、

佛陀の慈悲や廣大なり、三世に通じ、十方に遍ねし、此廣大の慈悲心、其幾萬分なりとも吾人の心水に映ずる時は、忽ちに四圍の恩を感ずる念慮油然として萌起し報恩の擧に出でずんば遂に心中の平を得ざるに至らん事必せり彼布施の行といふも忍辱の行といふとも必竟慈悲心を感ずる度の深淺によりて、其作用の强弱を生ずべきあり不殺生不偷盜等の諸戒も亦皆源を慈善に發するとを以て之を要するに佛教信徒の擧止動作悉く慈悲の一心の發現に非るはなし此慈悲心を以て社會に向はゞ其爲す所、甲たるを問はず乙たるを論せず悉く能く布施の眞意に契當し、慈善の目的に適合するを得べきなり

會報

◉三重縣國民佛教團

伊勢同縣出身なる京都帝國大學、東

京帝國大學、學習院、高等學校、慶應義塾、專門學校、本願寺大學林、本願寺文學寮、大谷眞宗大學、大谷眞宗中學、高田派勸學院、哲學館、三重尋常中學、京都尋常中學、愛知醫學校、京都醫學校、三重師範校、京都師範校、京都商業學校、京都獨逸學校内の青年佛教徒同盟して今回題號の如き會を組織し、本部を四日市四ッ谷新町蓮生寺に置き、支部を各地に置くことゝなし、朋友を分て特友、正友、助友の三友となし總裁、評議員、理事、會計各役員を設けて會務の進行を計り慈善、教育、衛生、産業、傳道の各部に向て青年佛教徒の新針路を開かんとの計畫ありとの綱領に曰く

一　本團は三重縣國民佛教團と稱す

一　本團は僧俗を問はず縣下の佛教徒を以て組織す

本團の主義は佛教の本旨に基きて各自の信仰を温め皇祖皇宗の大道を鼓吹して社會の渾濁を救ひて以て國家の進運を企圖する事

一　本團の主義に基き着手すべき事業を分ちて左の五部とす

一慈善部、（感化保護院若くは孤兒院を設立して免囚及貧兒を救濟する事）

一教育部、（女學校を設立して女子教育を盛にする事及貧民學校を興して學に就く能はざる學齡兒童及徒弟を教育する事）

一衛生部、（時々講師を聘して衛生上の注意を促す事）

一産業部、（國利民福を增進する爲め殖産興業を奬勵し且つ時々社會問題を討究する事）

一傳道　、（甲乙二部を設く）

甲部、（時々講話演說說教を開きて以て本團の主義を滲き佛教の感化に浴せしむる事）

乙部、（毎年一回宗教教育及學術に關する夏期講習會を開く事　會期各學校夏期休暇中二週日）

河内

◎北河内郡顯耀會　河内國北河内郡友呂岐村の北河内顯耀會は今回本會の主義綱領に滿幅の贊成を表し爾後氣脉を通じて諸事本會の下に從て運動すべき旨を通じ來れり、同會は會員四百名以上にして、尊王奉佛の誠意を顯耀するを以て主義とし、本部を北河内郡友呂岐村大字石澤愍重寺内に設けゝあり、

播磨

◎明石の演說會　播州明石町の朝顔共同會の發起にて去月廿八日同地巡廻中の南條文雄博士を招聘して、同町光明寺に於て佛教演說會を開きしに聽衆無慮六百餘名にして頗る盛會、博士は懇篤なる演說ありしと尙翌廿九日にも同師を聘して一席の法話を乞ひたるよし

甲斐

◎山梨佛教靈光會の釋尊降誕會　山梨縣市川なる同會にては去月十七日（舊四月八日）同會末部に於て釋尊降誕會を執行したり初に各宗僧侶の讀經燒香あり、後同會惣代告白文を朗讀し式後演說講話會の催あり、市川本堯、宮坂素玄、村松志孝諸氏順次に演說し、後茶話會を開會し席上、宮坂大眉氏の演說ありしといふ、同會は毎月三回づゝ佛教講話會をひらきつゝありといふ

上野

◎高崎各宗同盟會　上野國高崎町に於ける各宗寺院二十六ヶ寺は此度各宗同盟を以て大演說會を開き、同地に於ける佛教を振作する見込を以て奮起し、其勢洵に盛あり、而して本月四日第一回を開き態々五十嵐光龍師星野仙梁師、及近角文學士を聘して、晝夜二度同町大雲寺に於て開會せり兩回とも同町に於ける政治家、實業家、軍人、學生等何れも活動的の人物のみを以て滿たされたり、蓋し同町の如きは、實業、政治等の熱盛に宗教の如きは陰氣なるものとして顧みざるの風ありしか今回の演說會に於て、宗教なるものか從來豫想せるか如きものにあらすして、積極的、活動のものたることを悟り、殊に今後宗教なるものは、實業界には其信用を增さしめ、政治界には其節操を養はしめ、軍事上には其精神を練るの大功あることを知り、殊に外交上政治上の關係より今後宗教制度は社會の一問題とならざるべからざることを知りて、滿堂の聽衆何れも感動し、各宗同盟を固くし、僧俗一致を以て益々宗教振起を畫力する氣風を生せり、蓋し同町に於ける各宗同盟は今日に初まれるにあらずして、遠く嘗幕時代より繼續し來りしが、今回再ひ其合盟を新たにし永く繼續して時々演說會を開く計畫なりといふ、元來同地は人情激越殊に任俠を以て鳴り、且つ實業盛なれば、今後、積極的方針を以て起るべき宗教は同地の如き、大に其活動を見るべしといふ

肥後

◎青年會熊本支部の釋尊降誕會　大日本佛教青年會熊本支部にては去月十四日熊本市廣町大谷派說教場に於て釋尊降誕會を執行したりて今その模樣を託さんに、定會に至るや先を爭ふて來會するもの潮の如く推し寄せ來り、滿場立錐の地なきに至れり、門前門内の裝飾美を盡し、式場には中央に尊像を安置し左右の體裁凡て備はれり、初めに鎭西中學寮惣代田眞龍、佛教青年會第五高等學校惣代藤井隨の兩氏祝文を朗讀し次に、各學校惣代一名つゝの燒香あり、次で同會幹事山口高男氏起て開會の趣意を述へ終るや、長尾雲龍師登壇數時に亘る演說をなせり、次に八淵蟠龍師は雷の如き喝采場裡に迎へられ、痛快なる辯を揮ひ大に聽者をして感動せしめたり終て餘興に移り薩摩琵琶の催あり一同歡を盡して散會せりといふ、

後志

◎北海佛教徒同盟會　後志國小樽入舟町の有志者は相計りて今回北海佛教徒同盟會を組織し本會と連絡して將來一致の運動を取ることゝなし、事務所を小樽入舟町四十四番地に置き目下會員募集に盡力中なりといふ同會の綱領左の如し

一本會は北海佛教徒同盟會と稱す

一本會は都て佛教信徒を以て組織す

一本會の目的は佛陀の聖教を崇信し和衷協同各自操行を高尙にして社會の風紀を矯正し以て國體の精華を輝かすにあり

一右の目的を達せんが爲に本會の着手すべき事業の方針を定むる事左の如し

一國の内外を問はず社會の交際は溫厚信實を主とし苟くも粗暴なる言行を慎み別して他宗異教徒に對しては無益の言論等を爲さゝるものとす

一高德の導師を聘して四恩十善等の法話を聽聞し時世適切なる教誨を受け事理の二相に觀達して處世の要道を研究すへし

一本會は漸次發達するに隨ひて教育及び慈善的事業に從ふへし

一本會は三府各縣の佛教徒團體と連絡提携を爲す事あるへし

一本會は會員一名に付き毎月金一錢以上金拾錢以下の會費を應分隨意に出金せしむ

一當分の内創立假事務所を小樽港入船町四十四番地に置く

以上

附加盟者は創立假事務所及最寄の各寺院へ申込あらんことを

◎本會役員の名譽職當選　今回東京市會議員半數改選の際に當り本會の總務委員たる今井喜八（淺草區）、西澤善七（日本橋區）の兩氏は競爭者なく何れも多數の輿望を以て再選せらる又加賀國小松同盟會の幹事米谷半平氏は石川縣貴族

院多額納稅者議員補缺選擧に當り平穩無事の間選擧終り是れまた大多數を以て當選せられぬ

社會

◉本願寺派の慈善事業　傳ふる者は曰く、本派本願寺に於ては老法主自ら發起して全國の門信徒に謀り十ヶ年の繼續事業として資本金一千万圓を集め、以て孤兒院、療病院、感化保護等諸種の社會的慈善事業を起すと同時に、或種の教育事業を起さんとするの企ありと、猶此十年計畫は五ヶ年を一期として前後二期に分ちて事業の進行を計る筈にてこは直に本山の事業とせず、一の財團法人として、萬事會員の議決を以て施行し、本願寺とは全く獨立したる佛教慈善會と爲す由なれど、老法主は自然該會の總裁と仰がるべく、又同派より右の勸誘の爲に布教師を派遣する等の事になるべしと、近來最も快心の報導といふべし、余輩は一日千秋の思を以て此報導が實現する の日を待たん願くは此吉報をして、前觸のみに終らしむる無からん事を

◉基督教果して衰へたるか　近來外間一般に評して基督教衰微せりといふ、中には同教徒にも頗りに氣を揉む連中も有りとか、成る程萬朝報が報導せる如く、金森通倫とか德富蘇峯とかいふ如き、所謂紳士所謂基督教信者が脫宗せしといふ事實は之れあらん、同志者問題の如く外國傳導會社と我國の基督教會と衝突を起せる事實は之れあらん、福音同盟會の代議士招待の企は行はれざりき、竹町の教會堂は賣拂はれたり、一般に評せば何と無く、賑かさは減したりといふべし、去れど之を以て直に基督教衰へたりと稱し得べき歟、僧侶は安眠し得べき歟、「曰く否々、开はホンノ唯新教中の而も一部分を見たるのみ、我邦基督教の大半を占むる羅馬加特力教の勢力は依然たり新教三十餘派に匹敵し得べき希臘教會は舊の如く盛なり、ニコライ教會堂は魏々乎たり、彼の鐘聲は相變らずジンヤ〳〵として都人士の耳朶を聾せしめんとするにあらずや、加之彼教徒の社會事業教育事業等を注目せよ、石井氏の岡山孤兒院は益盛に、住吉屋老人の上毛孤兒院並榮江、原氏の免囚保護事業、大須賀氏の孤女院、押川氏の海外教育會等數へ來れば、幾多の好事業皆着々成功しつゝあるにあらずや、其他女子教育に、音樂教育に皆大に手を伸しつゝあるにあらずや、其他感化事業等を研究する者は彼教徒に多き事も亦事實ならずや、余輩は謂へらく彼教徒は目下雨降て地固まるの觀なきにあらず、佛教徒決して油斷すべさの時にあらざるなり、彼教は優に猶一敵國なるを忘るべからず、他山の石と爲その覺悟は終始保持すべきなり、之れ單に彼教法を惡んで排斥せるとにあらず、善を爲すは決して人に讓るべからず、佛者競て善事に於て彼等を壓倒せよ、之れ君子の爭なり

◉自治制と黨爭　地方と政黨とは素と別物なり、從て兩者の利害得失たるや何ぞ關する所あし、然るに帝國の首府なる東京を始め其市府議員等の選擧には地方の利害得失を顧みず人物の如何を問はず、只管政黨の得喪のみを標準として相

爭ひ、名譽の公職を以て黨爭の餌食となすの弊風近來益增長せり、是豈自治制の危期にあらずや、政黨員中亦識者なきにあらず、地方自治體は中央議會とは異にして、黨派問題を以て決すべからざるは了知すべき筈なり、然るに敢て黨爭之れ力むるの狀なるは、所謂鹿を逐ふの獵夫は山を見ざる者か、吾人は敢て勸告せん、眞摯なる我同志者は、黨派の如何に着目せず、眞個に地方の利益を增進するに適當ある鄉の善士を擧げて、以て自治制の神聖を擁護するの覺悟なかるべからずと、

◉內地雜居の準備　の聲は近來諸種の方面に喧し、是七月以後には歐米人續々內地に入り來りて、門々戶々異人種相接するに至る如く相像するに因る事なるへし、若し然く多數の外人入り來るに至らは此上無き名譽なり、然れども此豫想の當るや否やは一疑問なり、固より新たに渡來する外人も有るべし、然れども在來本邦に居住する外人にして、日本の法律の下に住するを厭ひて、上海香港あたりへ立退く支度を爲すも案外に多しとぞ、若し內地雜居の曉に至りて從前よりも外人の數を減ずる如き奇觀を呈する事もあらば我邦の不面目不利益は莫大なりといふべし、去れば官民共に胸襟を打開きて外人を歡迎するの意を表するは、內地雜居に對しての準備中最も重要急須なるものにあらずや、余輩同志は力めて宗教上の衝突等無からしめ、排外思想の勃發せんとするを豫防開導せざるべからず、

◉支那人を如何にすべきか　內地雜居の期月も愈〳〵目睫の間に迫れり、然るに今日に至るまで支那人に對する取扱は決定し居らずと、其筋にても其說は四種程に分れ居れりと、其中尤らしく且勢力ある說は、內務省は支那人は元來不潔を厭はざる人種故今直に彼等に對して衞生の取締等甚た困難を感する事多かるべし、去れは猶從前の如く居留地制度を取りて內地を開放せざるに若かずとの消極的議論を取り、外務大臣おとは此際歐米人同樣雜居を許すべし、若し不都合を生せば其時に應じて又取締法を設くべしと主張すと、之れ大に研究を要すべき問題なれども、大に支那人が我に信賴せるの今日、歐州人等が淸國割取に着手せるに我邦は獨り指をくはへて傍觀せる今日は、萬事に付て淸人と親密にし、利害關係を大にし、冥々の間默々の裡に在りても隱然淸國に對して、權力を增進せしむるの必要なるを知らば、余輩は後說に左袒せんと欲す、

◉高等視學官　の官制はを面白きはなし、滿廳悉く內務省の管下に在る地方廳內に、唯一人文部省より居候に入りて、能く効果を擧げ得べきや、餘程の敏腕家にして知事始め殘らず我意見に從はしむる技倆あるか、左なくば唯々諾々萬事地方長官の意を逢迎する者にあらざれば必ず衝突を起さん元來今日地方の尋中尋師等の教職員の任免黜陟選擇を擧けて教育に無識なる地方長官に一任するは其弊尠少ならず、文部省は發發して此等の全權を內務省より分割して、直轄の一局となす事猶地方收稅廳が大藏省直轄なるが如く爲すべし、

◉僧權の侵入　アーメン新聞の名ある每日新聞は、餘程

案せられると見なして、口を政教混亂に籍りて、切りに佛教徒の擧動を非難するを力むるは殊勝の心懸なり（耶蘇教に對して）然れとも、案するを止めよ、佛教者は決して政教を淆亂して我利を働かんとの野心は存せさるなり、試に史を繙きて撿せよ、斯る憂は佛耶兩教何れに多きか、然れとも佛教者として當然有すへき權理を叩りに爲政者に抑屈せらるれは、忍ひ得へきにあらす、之を伸張せんとするは決して不思議にはあらさるなり、

◉臺灣の教育と佛教徒

植民に宗教の必要ある事は本誌既に論する處あり、臺灣の教育に佛教徒の任をへき事亦「東朝」の論する所の如し、方今臺灣は土匪の騷きも大に減したりとはいへ、元と他國民なれは幾分か我に對して慊焉たらさるものあることは必せり、之を心より悅服せしめんとするには、迂遠なりと雖も教育に依るより善きはなし、而も感動の強き宗教的教育に賴るより善きはなし、就中國体に恰適し、高尚の宗教にして、且彼等を教育すへき教師を數多有する宗教に依賴するは最良方便なり、佛教徒は此資格を具有する唯一者なり、卿等は內地に在りて徒に擔家の機嫌を取らんより、奮て臺灣教育に從事せよ、國の爲なり、法の爲なり、而して我身も亦愉快なり、各宗本山の如きも、須く此に着目せよ、

◉東亞に於ける回教徒

支那問題の盛なる今日より甚しきはなからむ、或は分割論を唱へ、或は保全策を講じ、或は列國と協議し其獨立を擔保し所謂一種の中立國となさむとせる如き、其勢ひ急流直下滔々歸する所を知らず、夫れ如此にして支那問題、散漫莽魯多くの政客か口角沫を飛して得意に議論する所なりと雖も、一も吾人の滿足を充す能はず、要するに彼等の觀察や狹隘にして偏小僅に自家の胸臆を捉へ來りて猥りに無責任なる放言壯語をなし世を欺くもの今日の政論家程危險なるはあらざるへし。

想ふに多の政客か何の思慮する所もなく彼等に取て無味乾燥として常に無用視し排拆し來りたる意想外の宗教問題をも恐くは支那問題中の大問題として早晩東洋の舞臺に活劇を演する蓋し火を覩るよりも明なり、而して近日清國內回教の徒劍戟を採りて起つものめりとの報を傳ふ、若し此報にして眞ならしめば東亞將來の運命茂々と乎して亦危殆ならずや、回教徒の數實に二億と稱す就中亞細亞に屬するもの一億有餘に及ふと云ふ若し此等の回教徒にして叛旗を翻へし硝煙彈雨の間に悲劇を演するに至らしめば死に瀕せる老大國の運命正に知るへからざるものあらむ我邦の政客大に注目すべきは夫れ宗教問題なる哉、眞摯に此問題を討究して後分割論を唱へよ、若くは保全策或は中立論を樹てよ徒に其本を究ずして其末に狂奔するもの豈に眞に支那問題を解したるものと云べけんや、余輩此の問題に對して所論なきに非す今は其一端を記して政論家の猛省を請はん

雜錄

殖民に對する宗教の必要

郡司大尉

次には今の今シコタンニ居る土人の事に付いて御話を申し度い夫は今度政府から、北海道舊土人保護法案と云ふのが出來まして、北海道に居る舊土人は夫々土地を貰ふとか何とか云ふ保護を請ける筈に成つて居る。處が同北海道土人でありながらシコタン土人許は此の保護に與かる事が出來ない法案に漏て居る。夫は又如何なる理由からであるかと云ふと、シコタン島には與へる丈の地面が無いと云ふ事で、他の土人は皆保護の恩澤を蒙むる中に獨シコタン土人許りは取殘けとされて居る實に氣の毒の至りである。何故にさうシコタン土人が繼子待遇をされるかと云ふに、之には種々の事情が有るので、內地の御方は御承知無い方が多くありませうが、抑、シコタン土人と云ふのは、チブカ人種アリウツ人種等で多くは露西亞の歸化人であります夫で元から此のシコタンニに居つたのではない、始めはオンチコタン、ボラムシロ占守あたに居つたのです、（中略）遂にシコタンへ連れて來て、政府の保護を與へ、漁具を與へて漁業をやらせたり、獵具を貸與して獸獵もやらせ、耕具をやつて農業をさせたり、機械を與へて工業を教へたり、牧畜を爲せたりしたが、處が彼等は何もしない、道具をやつても用ゐないたり捨てしまつたりして、さつはり勉强しない、網も鐵砲も鍬も何も一寸も手に取らないで働かない、其處で戶長は此の土人程致樣の無い土人は無い厄介なやつはない、シコタン土人は皆致方の無い者と極めてしまうし、又土人の方では、彼樣な戶長などの云ふ事を聞いては致方が無い、何處迄騙されるか知れぬ、彼等の云ふ事は決して聞かないか良いと思て居る、（中略）兩方か斯う成つて居るから戶長の方では彼等程仕樣の無い者は無ゐと思ふて居るし、彼等は又戶長を惡む事酷いのであるから、遂に此の度の樣な、一般の保護法案にも漏れる樣な事に成り行いたのであります、夫て舟かシコタン島へ着いて、內地人か上陸すると、土人等は續々やつて來て酒を呉れ、砂糖をくれ、煙草をくれなと云ふて煩くやつて來る、夫にやらないと何てゐ手當り次第物を盜んて逃けて仕舞ふ、又シコタンにはシコタン松と云ふて良い松が有る夫を內地人などが所望して取て來てくれと賴むと、二圍くれの三圍くれのと云うて望む其處で高いとは思ふても松の欲さに金を遣ると、夫を以て往つたなりで何處へか逃げて仕舞ふ樣な有樣であるから困るので、然し又此地の人も惡い事がある、シコタン土人だからとて始めからさう皆がわるかた理でも無からが、彼地へ行つた者などが、始シコタン土人の船に來て交易を願ふ虛に乘じて、彼等の持て居る鴨の外套と云ふて、鴨の羽て作つた美麗な上着を持つて居るのを交易を勸める、彼等は非常に酒が好であるから、夫ではブランデイ何本と交易しやうと云ふ樣な事を云ひ出す、すると內地人はよろしいと云ふて眼の前に瓶を並べて、偖先一本を御馳走にやると云ふて强ひてずん〳〵呑ませる、彼等は甘いから喜んで呑む、其の內に醉て仕舞つて、其處へ倒れて寢ちまふ、其處で彼の鴨の上着此方へ取つて、小舟へ乘つて陸へ送つて置て來る、しばらくして醉が醒めて見ると、鴨の上着は取られたがブランデイは一本も無い、驚いて船へ往かうとすると、船は既に出帆して仕舞つて居ると云ふ樣な目に遇はした。又シコタン土人は盜む事が上手と云ふ樣に成て居るから船かシコタンへ這入ると水夫等盜みをする事は非常で誰の紙入が無くなつた、そふらシコタン土人が持つて行つて仕舞つた、彼の革包が見えないそうらシコタン土人がもう盜んで往つたと、皆シコタン土人にかずけて仕舞ふ、さあ斯う云ふ有樣で、シコタンへ行けば騙したとか、騙されたとか云ふ話し許で、內地人は土人さへ見れば誰も彼も兄弟の樣に思ふし、土人は又シヤモと云へは陸奥の人も、薩摩の人も同し者と思ふて居る、故に甲の怒を乙に對つて晴すと云ふ樣な事が始終あるので、兩方の感情が、愈〻益〻惡く成つて來るのであります。

シコタン土人は始から皆さう虛言つきで有つたかと云ふに、決してさうではない始めは極めて幼稚な、人を騙すなど丶云ふ智慧は無かつたのであります。其の理由は、彼等はずつと

元はカムチャツカに居つた、夫が占守へ保たので、其の占守に居る頃露西亞の宣教師と、商人が來て暫く居つたさうでそ此の宣教師は――今でも堂が殘つて居りますが――占守の東南の山の中腹に堂を建て、此に居つて、此の時分は二百四五十の信徒とも云ふべき者が有つたさうで、堂は九間四面許のものであります。夫で宣教師は毎朝祈禱をすると村の者が大概出掛けて行て、參詣して、さあ之から夫々仕事に出掛けると云ふ時に、今の宣教師は皆にブランデーヲコップニ一杯宛呑ませてやつて、今日も勉强して澤山獲物を持つて來い、又獲物の多くある樣にと祈禱してやる、すると土人は喜で其の酒を御馳走に成つて仕事に出掛ける。一日獵暮して皆夕景には堂へ集つて來る、其處で獲物の有つたものは夫を見せると宣教師は稱讃てやる、又獲物の無かつた者には明日こそ勉强して、他の者にも劣らぬ樣に獲物を持て來て見せよと諭して歸す、獲物の有た方は、稱讃られて喜びながら今日の海虎は斑も良し、皮も大きいから、之なればブランデイの一箱や二箱と換へて呉れるぢやらうと思てつ商人の所へ持て行く、大抵は酒なり煙草なりに易へてやるが、中には今も云ふ通り澤山に易へられるだらうと思て居るのに、商人の方では僅にブランデー二本だとか、煙草幾斤だとか云て、何うしても相談の纏らぬ時は、土人もつまらんと思ふて、交易を止めて歸る、すると商人は直く其の事を宣教師の所へ通知してやる、宣教師は通知かあるおり、荷物を片附け始めるので夫を土人が見て貴師は何をなさるかと尋ねると、私が斯うして此處に來て居る入費もハ御前達に毎朝呑ませる酒も皆商人から貰ふを居るのぢや然るに今日皮を持つて交易に行つたそうぢやが、商人の云ふ丈では氣に入らんで交易をせぬと云ふて歸つて仕舞ふたさうぢやが、商業と云ふものは幾分かの利益が無ければならぬものである、然るに思ふ通に交易せぬからと云ふを持て歸る樣では兎ても將來交易して居られぬから、今日限此を引上けて歸ると云ふから、私も歸らねばならぬ決して御前達に交易を勸める理では無いが、商人に歸らしては致し方が無いで私も歸ると云ひ出す、すると土人等は驚いて、此の御方に歸らしてはもう毎朝酒を呑む事も出來ぬし、難有い話を聞く事も出來ぬから、何うかして留めなければ成らぬと云ふので、仲間同志相談をして、頻りに留て呉れと賴む、すると宣教師は夫はもう留まつて居り度いけれとも、商人が歸ると云ふから仕方が無い歸らねばならぬと云ふので、此處に至て土人は商人を留めるのに、は彼の良い皮をつまらぬ、少しの酒と交易するのは殘念ぢやけれとも、夫を交易せぬは宣教師さんが歸ると云はれる、宣教師さんに歸られては困るから、殘念ぢやが商人と交易をすると云事に落着すると云ふ有樣で有つたさうです。之で何十年間住んで居つたのであるから、中々人を騙すなぞゝと云ふ考は無かたのである。元より金錢と云ふ樣なものは無ぬのであるから、彼等はもう獵虎の皮程結好な物は無い、之で無くては交易は出來ぬものと思て居た、其の證據は彼の十七年に彼等をシコタンに移さうと云うので折田平内や、芳川顯正などゝ云ふ人が、濱船に乘て往た時に土人等は斯う思ふた、折田達の金鎖を下げたり何かして居るのを見て驚いて、何とも生れてまだ見た事も無い樣な立派な風をして居るが、彼の人達の居る所には屹度獵虎が澤山居るに相違ないと思ふて居たさうである。夫であるから愈シコタン島へ移れと云ふ事を云ひ出した處が、先其處には獵があるかと尋ねた、すると折田等の方では、夫々獵具も貸してやるし、又獵は充分あると云た、夫で喜んで皆シコタンへ移た、處がシコタンへ來て見ると云た獵場らしい處も無ければ、獵虎の影も見ぬない、又獵具と云ふがどんなものをよこすかと思て居ると。思ひ掛けない網なぞをよこす、此樣なもので獵虎か取れるものかと云ふと、村長の方では獵具を遣つたのに何を爲て居るか、早く魚を取らんかとせめる、獵虎が居ないと云ふ、魚を取れと云ふ、つまり始めに土人が獵があるかと尋ねたのは獵虎獵の事である、夫を此方では漁獵と思て獵があるとと答へた、全く獵と云ふ事の解釋違つて在たのた、漸く其の事が解つたから、村長が御前達は頻に獵虎と云ふけれとも、獵と云ふのは漁獵の事た、魚を取れと云ふて此處へ連れて來たのたと云ふが處が、彼等は非常に驚いたので、なーんだ、つまらない、魚なんろうなら、此樣な處まで來なくても、ばらむしろで澤山取れる、トツカリ（獵虎の土語歟）が取りたければこう此樣處まで來たのた、こりやあすつかりしやも（日本人）に騙されてしまつたと深く思ひ込んた。夫に又彼等が之迄酋長として、服從して居つた頭は、力も有れば、働きもある、鐵砲も打てば、網も上手と云ふ樣に一番優ものであるのです、然るに夫等の酋長を廢して村長とか、戶長とか云ふ者が來る事に成つた、何樣なねらろ者が來るかと思て居た處が、痩つこけた、力も無ければ、鐵砲打つことも、網を引く事も出來ない樣な的が來て、やれ歳が幾歳じやの、名は何と云ふのつて矢釜しい事許を云つて居る――彼等は自分の年齡を知らない、名なとは元より無いのですから、其樣な事を聞いたからとてわかるわけか無いです――而して自分か强けれは、何人女を持つて居樣か勝手たし、力か無ければ女を持つ事の出來ないのは當り前ちやのに――實になさけない料見です、尤も女を澤山持つのは、必しもシコタシ許りでは無い、內地でも矢張力の有る的が、妾だの何のと云て隨分澤山持て居ます。――夫を取上けてしまつて、力の有る無しも見分けずに分配した、實にひどい事をするやつた、と斯う思ふた、而して其の中の最良いのを御役人樣が取つたのたさうです。――斯く酋長と戶長との區別を知らぬ彼等には、事毎に奇怪で、無情で、不滿足でたまらぬ、唯だまされた〳〵と許り思て、口惜しく感じて居る而已なので、もう彼的等の云ふ事は聽かぬと決心して仕舞つたのです。

各道廳の方では、往く戶長も、往く戶長も、シコタン土人はいかんと云ふ報告をするから、遂に道廳會議でシコタン土人は到底手に合はぬ、いかん的ときまつて仕舞つたのすあります斯樣な事情ありますから、之から先も今の儘では決して感情の融和する見込は無い、益々惡く成る許であります

彼シコタン土人の思想の幼稚なる事は、是迄の話で大概御解に成りましたらふが、尙一ッ申しますと。彼等が唯獵虎の貴い事を知て、漁獵の價値も知らなければ、金錢の何ふ云ふものたるも知らない事は。彼等に何ふかして漁獵の利益ある事を敎へてやりたいと云ふので、當て重なる者數名を根室へ連れて參たさふです、彼等は見る者毎に驚いて居つたさふです、其處で段々話をして、彼の立派な家に美麗な服を着て居る人は、至て島の鮭や鱒を好むのであるから、漁獵を勉强して鮭や鱒を取つて持つて來ると、紙幣と云ふ何でも購へる自由な物と交易してやると云ても、其の紙幣の功力と云ふ事を疑て居て何ふしても信じ無い、其處て紙幣を渡して、之で御前達町へ出て何でも自分の欲いと思ふもの、酒でも、煙草でも何でも取て之を出して見なさい、決して承知を云はないで呑ましたり食はしたりして呉れると段々話した處か、さあ半信半疑で、先一つ夫ではためして見よふと云ふで、町へ出掛けて呑み度いものを呑み、喰ひ度いものを喰ふて、彼の紙幣を出すと、皆喜んで夫を受け取る、此に始めてやら疑か晴れたらしかつたが、其の中の一人は最も之に感じて、根室の役人に對つて、眞に此の紙幣と云ふものは都合の良いものたから、何ふか之を製造る法を敎へて呉れと云ふたそふです。之でも又彼等の思想の單純なる事は見かります

ふ彼等の宗敎は何ふ云ふ宗敎であるかと云ふと、元が露西亞人で、中頃露西亞宣敎師の敎訓を受けたのであるから、全島が舊敎徒なのであります。故に北海道の喰い詰め書生なぞが十字架でも首へ引掛けて、舊敎宣敎師がなぞ云ふて行くと大に歡迎される、今でも、頻に以前古守に居た時分に、彼の每朝酒を呑ましてくれた方が有たが、あゝ云ふ人がもふ一遍來て呉れゝば良いがあーと云ふて居る、稀には佛敎の坊樣方も行かれたさうですが、何だかさつぱり解からぬ事を云うて居

る、夫て我慢して聽いて遣るのだから、後で何かでもくれるかと云ふと、くれる處か、之を御布施に貰つて行く、彼も御布施に貰つて行くと、皆持つて行く、先の宣教師とはまるであつちこつちであると云ふて居るさうです

夫で彼の士人が、幾分かでも良い方へ向き内地人と親しくなる見込みでも有ればまだ良いけれとも、今の處では一寸も其の傾向が無い、彼等は此のシコタンに居るのが何よりいやので、若之を占守、又はパラムシロへ移したれば、幾分か滿足させる事が出來るかもしれない、何故と云ふに、彼等は極めて肉食を好む性質である、其の證據は土人の家には、大概海豹の手が乾してある、夫を子供の四ッ五ッのが泣いて仕方の無い時に投げてやる、若此地の者だつたら如何でしやう、海豹の手なぞを子供に見せたら、泣きやむ處か、氣違になるかも知れない、然るに彼の土人の子供は夫を見るなり喜んで泣き止んで、べろ〳〵と舐めて居ります、之て彼等の肉食を如何に好てあるかと云ふ事はわかりましやう。處が彼のシコタン島の附近は、今日では最早獸類を產せぬのであります、彼等の不滿足も無理の無い話です。滿足と云ふたからとて固より知識の卑い者であるから、決して大した事を望んで居るのでは無い、少づゝの肉食と、酒、煙草が時々呑めさへしたら、夫で滿足して居る位なのです

夫を彼等は、何んな惡い事でもする樣に、世間の者は思て居るが些細の事に滿足する樣な者が、何大した惡い事が出ますせうか、然し他の者が惡い知識を付ければ、隨分惡い事も致しませう、けれとも自身は夫程の大事とは知らずに居る位かものです、彼等が働かないと云ふ事は全く事實なので、夫には又理由があるのです、つまり此方の者が怠る事を數へた樣な者です、其の理由と云ふのは、彼等も始からさう働かない事は無つた、夫に道具を與へられたから、最初は眞面目に働いた、處が其の獲物を一と纏にして村長が根室を持つて往つて賣捌いて、其の金又は品物を歸つて來てから平均に分配する。夫では働いた者も、勞かない者も同じことで有るから、遊んで居ても同樣に貰へる事なら、骨折つて働くのは馬鹿氣て居るから、段々働かなく成つて仕舞た之は當り前の話で、誰でも此う云ふ處置をされゝば働かなく成るです。ですから之は餘り働かなねと云ふて土人は責められねのです。

今日の處では、士人が人を騙すと云ふ事も事實です、夫はもう此所の者計りて騙すのでは無い、彼等の内でも、アリウツ人種、チブカ人種と云ふ樣に人種が變つて居るのですから、互互に虛言てつき合ひ、騙し合て居るのです。中に根室の小學校を卒業したなど云ふものも有るが、夫等は最もずるい、今日の處では實にも一段々惡い方へ計進んで居るのでありまも。

之は私がしばらくの間シコタン土人と一處に居て親しく聞いた事柄でして此の話を致して此憐むべき土人の救濟策を御考へ願ひたいのであります

往昔は山を開いたり、道を作つたり、橋を掛けたり、野原を衝切たりする樣な冒險的の事や、探險などと云ふ事は皆僧侶方の受持ちの樣に成は居ては、世間の者に之を試した者が少ない、之は何故ちやと云ふと事業の困難を忍んで行くに信仰力が無ければ出來にい、世人には何うも其信仰力が弱いし、僧侶方は信仰力の問屋であるから、自然冒險もせられ、探險家も多かつたので。彼の恐山の崛を始めて探險せられた慈覺大師の如き、嘸かし困難で有つたらうと思ひます、實に當時の僧侶方の意氣の盛んであられた事は彼の一事でも推測る事が出來ます。貴僧方も其の信仰の問屋であるから充分御盡力を願ひたいので、一つ探險しようと思ひ立たれたなれば吾が國に探險すべき處は澤山あります。南の方で云ふたら臺灣であるとか、或は天草、南洋などにもあり、北の方には北海道千島、もうつと先へ行けば幾干でも有ります、今のシコタン島に致しましても又はカムチヤツカ、或は今でも親子て夫婦に成つたりなどして、禽獸にたんと變らぬ樣な生活をして、

人種が段々減じて來ると云ふ樣な、憐むべきギリヤック、マルチヨンなどゝ云ふがありまして、一度貴僧方が人を救濟して遣らうと云ふ御考を起されましたなら、救を冀て居る者は世界に澤山ありますから、御奮勵を願いたいので。往昔の高僧方は此の探險、救濟を受持て居て下された樣に自分は思ふて居りましたからして、唯今も無遠慮に斯く申す次第でありますが、何卒詞の整はぬ所は御聽き捨て被下まして、何分共に願ひ度い考であります

尙御話申し度い事は種々ありますが、餘り時間永がく成りますから今日は先之て終ます

(完)

信教

靜觀錄

近角常觀

(九)詩的信仰は一種の觀察なり

世に一類の學者ありて、宗教も一般社會の爲には隨分必要であると論ずる人がある、此種の論者は宗教に對して社會的觀察をなし、其道德的感化の偉大なるを認めたりと雖、此の如き口吻を以て宗教を評する間は、口には必要と言ひつゝも其人自身の爲めには宗教の必要を感じない證據である、此人々の頭腦に映ずる宗教觀なるものは多數愚人に對する假設的方便說にして士大夫學者は之を待たずとも道德の實行に差閊ないと云ふ考である、此等の人は第三者に立て宗教と社會との關係を眺めて居る、若し一歩進みたる人なれば、宗教に對する詩的觀察が始まつてくる、即ち宗教も中々面白き點があると考へる、先づ宗教者の傳記を見て、頗る痛快なる活劇である、高壯なる行跡であると考へ、一種言ふべからざる狂熱を有して、一生の始終したるを驚嘆し、又其說法の縱橫無盡にして捕促すべからざるをみて、頗る興味ある說話なりとし、想像力を馳することゝ如何にも人の意表に出てたるに驚ろき所謂方便說として冷眼視して居る人とは異りて、荒誕であるとか、或は虛構であるとか云ふ點は問はず、寧ろ其理想の高大なるを喜び、情操の高潔なるを嘆する樣になる、此種の人は慥かに宗教に對して詩的觀察をなす人である、既に詩的觀察をなすに至れば、所謂宗教必要論者とは異りて、第三者の地位に立ちて宗教を觀察して居る、されど觀察は觀察である未た直接に宗教に觸れたとは云はれぬ、勿論宗教に對して一種の興味を見出したるに違ひない、然れとも未た宗教を以て眞實なりとする觀念が薄い、動もそれは、此等の人の宗教觀は、宗教的性格を以て病的と考へ、宗教的說法を以て詩的想像と觀察する、結局宗教を以て內心の投影として其實在を認めて居らぬ、若し心の奧底に一點此等の心が存するときは未た信仰の門戶に達したとは云はれぬ、或は宗教の一滴を味ふたものと云てもよいかもしれむ、しかし信仰的に味ひたるのではなく詩的に味ひたるのである、眞面目に宗教を握つたのではない、道樂的に宗教を弄んで居るのである、

抑々信仰なるものは宗教を以て實在なりとし、眞實なりとする考が中心でなくてはならぬ、如何に宗教を高尙なりと考ふるも、微妙であると考ふるも、又極めて愉快であると考へても、若し眞實の歡念が伴はざれは、悉く根據なき浮々したものとなる、かく云へばとて決して强制的に信仰を從せ

ぬはならぬと云ふではない、私は勿論模型に鑄込めた樣な毫も活動なき毫々情操あき信仰は好まない、寧ろ此の如きものは信仰とは認めない、去り乍ら又極端に活動を以て宗教とし情操を以て宗教と考ふるは大なる誤てある、近時宗教か信條的信仰を脫して、活動的の信仰、情操的の信仰か熾んになつて來た、是慥かに宗教か新生命を吹き出してくる徵候にして順序として宗教の社會的方面、情的方面か芽を出して來たに相違ない、私の如きも情方面につきて自己の修養を重ねたいと考へて居る、こは、前に云へる社會的觀察、詩的觀察とは異なりて、確かに信仰の範圍に入るものに違ひない、されど單に社會的の活動のみを以て信仰とし、人間の情操のみを以て信仰とするときは、信仰に眞實の觀念か伴はぬ若し眞實の觀念が伴はざれば決して眞面目になるものではない、宗教の眼目とも謂つべき眞摯と云ふことが伴はぬ、若し眞摯の氣風なくば如何に活動あるとも、好むで事を起し、平地に波瀾を生ずる樣になる、若し眞摯の精神なくむば如何に情操を高尙にするとも、道樂的に信仰問題を弄び、物好きに安心問題を呼ふ樣になる、こは前に云へる如き宗教を詩的に觀察したるではない、併確かに詩的に宗教を信仰して居るのである、宗教を想像とは思はざるも、其信仰の心持が慥かに詩的である。

詩的信仰の地位に居るものに對して試みに眞實の觀念なきやと問へば、勿論眞實と思へり實在と思へりと答ふべし、何んとあれば既に幾分か信仰の地に達せる故である、されど果して眞摯に然るや否やを考ふるに頗る疑はしい、蓋し詩的に觀察する人なれば意識的に眞實の觀念なきことを自覺するが故に、一旦其非を稽れば進むべき路は前に開きて居る、之に反して詩的信仰の地に陷りたる人は動もすれば古來の信條に對して疑を挾さむぬ程迄自ら眞實の觀念に住せりと考へ乍ら、其實は眞實の觀念が伴ひ居らぬ、即無意識に眞實の考を拒で居る自己の未熟を自覺して居らぬ、自覺して居らぬ、故に頗る得意で居る、握つたつもりで握つて居らぬである、こは世の所謂未信者と云ふものよりも寧ろ信者を以て自ら許して居るものに多い、古來宗教の實修法は靜坐と懺悔の二の方法を出でない樣である、而して生悟りをして得意がり、若しくは虛僞の懺悔をして得意がつて居るものは固より論外であるが、余程眞面目に行ふて居る心持で居ても、靜坐して愉快であるとか、若くは胸臆を披瀝して愉快であるとか愉快と云ふ形容詞を以て言ひ顯はす樣なることでは、頗る警戒を要するのである、頗る危險に瀕して居るのである、雨窓燈を剪りて同心の友と語るは洵に會心のことである、況んや宗教の事を語るに至りては他に知るべからざる快がある、併快を以て、形容することの出來るのは畢竟詩的信仰の面目を顯して居る、言には云ひ顯はし難きも一點の何處かに餘裕か存して居る、氣樂な心持が顯はれてゐる、眞摯の態度は所謂頭燃を拂ふが如き有樣でなくてはならぬ、抑々愉快なぞ云ふ言を以て形容の出來るのは人と人とが語りて居る心持であるからである、人相語るなればたとひ宗教の事を語るとも、

は俗談に過きないのである、全體懺悔は人と佛と相語るのである、滿身敬虔の情と感射の念か溢れて居らねはならぬ、此境にありては眞實に觀念の有無抔云ふにも及はぬ話、滿身感謝の念と共に所謂大歡喜の情操は溢れてくる、愉快なと云ふ形容詞では頗る物足らぬ心地かする、

靜座をして愉快かつて居るは如何にも氣樂てある、經驗談をして面白いと云ふて居るは眞摯てない、洸空の難とか疑城胎宮とか云ふこと其實驗上より來る一大警戒てある、實に詩的信仰は人をして小康に安んせしむる懈慢界てある、回顧し來れは全体私の如き靜觀錄を書きて居るも慥かに此界に墮落して居る氣かついてみれは悚然として穴にも入りたい、靜坐若くは經驗談をするときは互に肅まねはなりませぬ、

会告

尾張の慈善家岩井利右衛門翁（承前）

本多藤里

○衣食　淳朴儉素は翁か天資に出づ、身に美衣を着けず、口に美味を食はず、家に什器を有せず、衣は寒暑を防くのみを要とし、食は口腹を充すを以て足れりとし、用ゐる所の調度亦必要の家具に限る、之れ決して形容の文字にあらず、例せば斯る富有の身にてありながら、翁は一の袴を有せざりしなり昨年十月章善會より翁の旌表式を擧行するや、翁は禮服者用の必要に迫られて、是丈の金か有らば、貧困者數人を賑はし得べきに惜しき事よと咳きつゝ袴を求めたりとは、何んボウおかしき話ならずや、去れども飽くまで世態に通じたる翁の事あれば、家人に對しても、決して客嗇がましき言行はなきなり、往年鐵太郎君が慶應義塾に遊學せられ居るや、翁は「若い者故折には氣晴しをするが好しとて」、青樓に登るべき料を月に三回程の分を見計ひて學資の外に送られしといふ翁も亦通人なる哉、

○衛生と潔癖　萬事に注意すべき翁の事とて、衛生の事は又格別なり、蓋し眼疾療養の爲、二ヶ年間名古屋病院に在りて獨逸の名醫ローレッ氏始め、有名の國手等に親しく、聞き得たる所を實行するものなれば、周到なる事言を俟たず、平素是とて業務もなき身なれば、常に蝙蝠傘をかざして、徐かに街中若くは郊外に散策するか仕事とせらる、故に下新田と稱する景色好き郊外（翁の家を距ること半里餘なり）へは十幾通の途筋ありなと言ひて、其各路に要する時間なとを一々擧くるとは、又閑人の閑事業の善なるもの、潔を好むの癖甚し面白き話もあれと略せん、唯尾籠なる所程潔に注意すと言はゝ可ならん、是より進んて翁か慈善の一般を語らんかな、

○慈善の順序　翁曰く、我れ施與を爲すに三の順序あり、第一軍人及ひ其家族を惠む事、第二子弟の教育、第三貧民救助なり抑我帝國民は畏くも　天皇陛下の洪恩に浴する渥きを以て片時も、忠義の道を忘るべからず、克く忠ならんと欲せば國防を緊要とす、去れば軍人に對しては上下一致して優遇を與へ、一旦事ある時は後顧の憂なく、勇進奮鬪せしむるの素を爲さゝるべからず、然らざれば何を以てか、萬國に對立せ

る事を得んや、國危くは家亦獨り安かるべからず、故に我は軍人を第一位に置く、又人若し教育を受けざる時は智に乏しく、智無くば迷ひ易くして一身一家をも亡ぼすに至るものなり、殊に今日の時勢は我等が少壯の時とは違ひ、智力の勝れたりといふ外國人にも交際を要する時節なれば、若左不幸にして、彼等に競爭に負くる事なれば、辛き目に遇ねばならぬと思へば、寒心の至なり、之を思へば教育を十分にして智德健全なる國民を養成する事は、之れ亦急務中の急務なりと思はる、去れば國民教育の事には及ばずながら、微力を盡し度き考なり、殊にも貧民の子弟多き學校の爲に盡すは最喜ふ所なり、次に力を盡し度は、貧民救助なり、世には行正しく心直きも不幸貧賤なる者少からず、憫然の極とふべし、殊に鰥寡孤獨廢疾の者などは、心有る者は袖手傍觀すべからず去れば我は聊此者の救助に盡し度思ふなりと、これ翁が持論の大要、着眼實着といふべし、

○無利息貸與の掟書　翁もと無學、然れども行事必法あり、其貧民に對する無利息金子貸與帳の初に法三章を書す曰く

一御掟をそむいた人（刑法律に觸れて刑を得たる人といふ義）

一生かわ（方言にて懶惰者といふ義）一酒のむ人

右金かせる事御斷申上候也

素朴の狀察すべく、又達識なる感すべきにあらずや

○翁の注意　深き事は又格別なり、衛生に注意し、淸潔に注意し、教育上には最注意を怠らず、時々津島町數四の學校へ學用品を寄附して、貧民子弟の用に供せしむ、昨春の如き

は萬國著名の都府の眼鏡見せ物來りしを以て、直ちに資を投して生徒に觀覽せしむ、又平素貧民窟を散歩するを樂みとす、其視察の鋭敏なるや、塵芥中にある芋大根の切端の多寡紙屑の多少、野邊に萠え出つる靑草の摘まれ加減、衣服の破れ塩梅、子供の扑き具合等一として翁の注意を免るゝ者なし

○受賞　明治元年七月諸物價騰貴し加之霖雨數旬に渉りたるを以て、翁は例の鋭き注意を以て觀察して、大に米の收穫を憂ひ、此上猶も米價の昂騰するあらは、細民は勿論中流以下の輩一般に糊口に窮追し、不穩の擧に出でんも圖るべからずと痛心し、所有の米穀は固く封して賣らず、猶多額の米を買入れて、救助の準備を爲せり、果せるかな米價暴騰し、中產以下の者頓に生計に窮め、是に於て翁は土藏を開きて準備米を出し、或は格別の廉價を以て賣り、或は救與する等、救助せし處實に廣し、此事早くも代官所の耳に入り、賞詞及ひ肝煎札を賜はる、之を翁か官廳より、賞を受くるの初とす、爾來翁は益慈善の業を娛み、或は貧民救濟、或は救育奬勵等の廉を以て、賞を受くる事、前後十有五回の多きに及べり

○慈善事業後來の計畫　既に言へる如く、翁は一千金の慈善基本金を定めし上に、猶巨多の金額を折に觸れて增加せしを以て、繼嗣者も勞せすして亦翁の志を紹き、慈善を爲すを得、翁の德また大なる哉

◎寄贈書目

●佛陀論（嘉美忍成著）　東京本郷六丁目五、哲學書院
●政教新論（藤島瞻岳著）　京都油小路御前通上ル　興教書院
無盡燈（第四卷）四、五號　京都高倉通眞宗大學內　無盡燈社
日本主義第二十二號　東京神田錦町二丁目六、　開發社
社會第一（第一卷）三號　仝　神田裏神保町九、　富山房雜誌部
開道二、三號　仙臺東二番町　仙臺婦人教會
松のみどり第二號　三重縣河藝郡一身田村　扶宗教會本部
和融誌二六、二七號　東京芝、愛宕町二丁目一六、　和融社
教育公報二二二、二二三號　神田一ッ橋通町　帝國教育會
反省第二號　京都高辻大宮西へ入　反省會本部
德風七九、八〇號　三河國碧海郡知立町　德風舘
東洋哲學（第六編）四、五號　東京本郷西片町十、　東洋哲學會
傳燈百八十六號、七、八、九號　京都下京八條　傳燈會
正法輪八九號　仝花園村　正法輪
佛教一四九、一五〇號　東京淺草吉野町　佛教學會
中央公論（第十四年）四、五號　仝本郷西片町十、　反省社
禪宗五〇號　京都市木屋町二條　貝葉書院
禪學（第五卷）第一、二號　東京神田駿河臺西紅梅町一二、　光融館
法話第百二九號　東京府下荏原郡品川町九五、　法話發行所
國學院雜誌（第五卷）第六、第七、　東京麹町區飯田町五丁目八、　國學院
教友雜誌三百廿三號、四、五、六號甲府市稻門村　帝國農業報二四、二五號　和歌山日高郡藤田村　帝國農業出版課
臺灣協會第七號、　東京麹町元園町　教友社
十善寶庫百〇九、百一〇號　東京小石川關口駒井町六、　十善會
天地人一六、一七號　東京神田錦町一丁目　三才社
北陸佛教青年會誌一、二號　石川縣金澤市安江町十、　仝社
東京帝國圖書館和漢書目錄（法律政治經濟ノ部）　東京帝國大學附屬圖書館
功德之母第一一號　近江日野町大字日田本願寺內　仝社
教育會報三號　廣島縣深安郡湯田村　眞言宗教道會
人道　神奈川縣足柄下郡蘆子村　仝社
勞働世界每號　東京神田三崎町　仝社

政教時報第十一號目次

●社說　政教問題、外交問題は導火線、公認教の精神、政治家の宗教に對する態度
●論說　盆と正月
●會報　各地運動の模樣
●社會　皇后陛下看護婦學校行啓●村雲尼公殿下●蓮如上人の遠忌●三眼●德風夜學舍●眞宗尙德會●國民教育の方針●學生の腐敗　殖民に對する宗教の必要
●雜錄　靜觀錄＝(八)信界に於ける監獄
●信界

本誌廣告

一、本誌は每月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれは御注文に應せず
一、本誌代金は必す小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

第八回佛教夏期講習會開設豫告

佛天の冥祐と有志諸彦の賛助とに依り、毎年、夏期、名勝の地を卜し講習會を開設し各々、力を心性の涵養に盡し普く、佛陀の德音を江湖に傳ふること既に七回實に左の如し

第一回　攝州須磨浦　第二回　東部鎌倉、西部二見浦　第三回　三州蒲郡町　第四回　相州三崎町
第五回　遠州新居町　第六回　東部陸前國松島、西部播州明石　第七回　尾州常滑町

茲に本年其第八回を越前國敦賀港に開かむとす、今や教界益々多事苟も吾人青年たるもの深く精神の修養に勉め、相互の團結を鞏固にせざるべからず、殊に越前若狹の有志諸氏本會を待つこと頗る切にして、今や準備既に成り同港海濱に於ける萬象閣を以て會堂に充て坐して天空海濶の壯觀を縱にせしむ、又諸講師の出演を諾せらるゝこと、本年の如く整頓せる鮮し、且つ本年は所定の講筵已外に特に講師に請ひ、靜座若くは信仰經驗談話會を設け、力を內的修養に須る、時々茶話會を開き眼中宗派の區別を沒し、胸裡學校の城府を設けず、平等一致、相互の氣脈を通し共に護法の大策を講せんとす。夫れ敦賀の地四通八達東西及北陸の要路に當る、希くは四方の同胞諸士奮ひ來りて共に清涼の德風に沐し微妙の法水に浴せよ謹て豫告す

◎講師　西有穆山師、大內青巒居士、奧田貫昭師、脇田堯淳師、加藤行海師、南條文雄師、村上專精師、黑田眞洞師、前田慧雲師、櫛田雷斧師、赤松連城師、畔上楳仙師、齋藤聞精師、清澤滿之師、釋宗演師、島地默雷師、森田悟由師、守本文前師（いろは順）

◎會場　越前國敦賀港萬豪閣

◎會期　七月十二日より同二十五日迄二週間

◎上宿費　一日十八錢內外

◎教育講習會　本會に附帶して教育講習會を開き、教育、倫理、心理、歷史、國史、國文、漢文、理科等の科目中便宜に從ひ之を講し、會員中學士等之が講師に當る、

◎順路　第一　東京よりする者は、新橋停車場より發、米原停車場にて北陸線へ乘換へ、敦賀停車場着（凡そ午後六時發の急行を使ふす）瀧車賃三圓五拾錢　第二　京都よりする者は、七條停車場、米原停車場を經て敦賀停車場着　瀧車賃一圓拾二錢

◎來會申込所　東京本郷區森川町一番地大日本佛教青年會事務所、京都花園妙心寺學林寶山良雄、越前國敦賀町大島妙顯寺夏期講習會準備事務所

明治三十二年六月

大日本佛教青年會

東京帝國大學第一高等學校德風會、東京專門學校教友會、哲學館宗教學會、慶應義塾佛教會、第二高等學校道交會、第三高等學校支部、第一高等學校醫學部樹德會、愛知醫學校支部、淨土宗高等學院、眞言宗豐山大學林、眞言宗高等普通學院、日蓮宗大學林、教導講習院、修道講習院、眞宗東京中學、關西佛教青年會、京都帝國大學、眞宗大學林、淨土宗學林、妙心寺學林、文學寮、眞宗京都中學、京都府第一中學、京都府醫學校、日蓮宗第二中學校、淨土宗京都中學校、佛光寺勸學院等、北陸佛教青年會、第四高等學校、金澤第一中學校、金澤師範學校、金澤工業學校、眞宗金澤中學、曹洞宗金澤中學林、大日本佛教青年會熊本支部、第五高等學校、熊本縣中學校、東肥教校、鎮西中學發等、諸學校有志

明治三十二年六月十四日印刷
明治三十二年六月十五日發行
（明治三十一年十二月二十六日遞信省認可）

東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同胞會出版部
發行兼編輯人　上村幸三郎　印刷人　清水朝太郎